

18目 関->坂下->土山->水口

18日目は11月28日(日)、7時にJR関駅をスタート、曇り。青空も見えているのにみぞれみたいな細かな雨が時折ぱらつき、風も冷たく、手袋を忘れたので軍手をして歩き始める。旅のお供のFMは電波が弱く、ミュージックプレーヤーに切り替え、最初の曲はジャズでサラボーン。

関宿 47番目 その2

17日目には早足で半分程見て関駅に急いだので、関宿の残り半分を見て回る。すぐにデジカメの電池が無くなり、関駅に戻ってタクシーの運転手にコンビニの場所を聞き、国道1号線を亀山方向に10分程歩いて戻る。コンビニで電池を購入、ついでに熱いコーヒーを飲んでからウォーキングを開始、結局関宿をもう一度最初から見て歩くことになった。

関宿の特長は前回書いた様に古い屋敷が多いことであり、電柱が無く電線は地中に埋め込まれているので、延々と古い軒並みの続く宿場の雰囲気がよくわかることである。宿場の中程に「御馳走場跡」の碑、これは岡崎宿にもあった江戸時代の迎賓館跡、本陣よりも立派な堂々たる構えの鶴屋脇本陣が目を引き、次から次へと現れる古い家に食傷気味となるほど。旅籠の玉屋の2階の窓の模様が面白い、きっと何かの意味のある模様だろうな。又、多くの家で玄関に正月でもないのに注連飾りがかけられている。

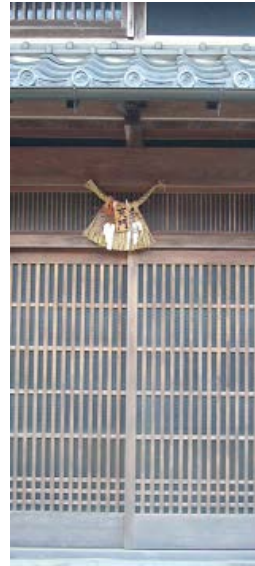
御馳走場の碑



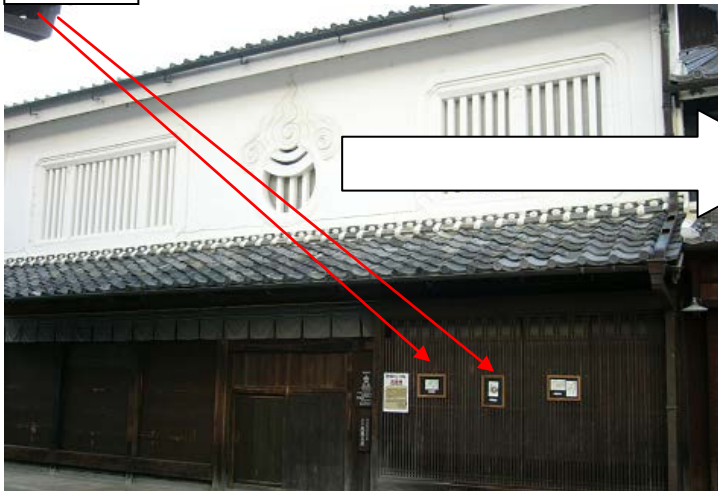
鶴屋脇本陣



注連飾りのある家



絵手紙



面白いデザインの玉屋の2階の窓



江戸時代とまでは古くなくとも、多分大正頃からの薬局があり、その看板が右から左に書かれていること、電話番号が2桁と言うのが時代を偲ばせる。 骨董屋の「夢一文」も町の雰囲気にもマッチしたネーミングで気に入った。 街道から少し入ったところに瑞光寺なる寺があり、その境内の柿は権現柿と呼ばれ、徳川家康が食べたというガイドブックにあるので寄り道、残念ながら早朝でクローズ。 前回に書いた仇討ちの関の小万の墓のある福蔵寺は山門が開いており絶世の美人の墓にお参り。

電話番号 45 番



夢一文の骨董屋  
ここにも注連飾り



関の小万の墓



### 絵手紙戦士

関宿の街道沿いの家々の表側に絵手紙風の葉書大の絵が飾られている。 絵柄は風景あり、野菜や果物あり、動物ありと面白く、気に入った絵柄は全て写真を撮りまくり、私が厳選したトップ3をご覧あれ。

私選絵手紙トップスリー





ひだりいか  
やまとみち  
の道標

町並みが切れかかったところで、小雨が本降りとなり、いっぷく亭なる無料休憩所で一服、雨はすぐに止み、青空が覗いてウォーキング再開。宿場のはずれで道が二股に分かれ、道標があり、「ひだりいかやまとみち」とある、伊賀には向かわずに右に曲がって東海道。



筆捨山

道はゆるやかな登り勾配となり、既に高原の雰囲気のある枯れたススキの原がところどころにあり、道路のガードレールには大根が干してあるひなびた山村を過ぎ、次の坂下宿を目指して歩いていく。

大根干し



ススキと朝日の当る山



途中に「名勝筆捨山」の看板があり、「室町時代の絵師狩野法眼元信が、あまりの変化に富んでいるこの山を描くことができず筆を捨ててしまった」が名前の由来とのこと。

道は国道1号線ではあるものの、そこは山賊で名高い鈴鹿の山中、周りの風景は深山幽谷、道路からはどれが筆捨山やら、見通しは全くきかない。

時折垣間見える溪谷は紅葉が美しい。あの流れに竿を出せばきっとアマゴが釣れるだろうな。

紅葉の溪谷





### 不思議な少年像

旧東海道は国道1号線を離れて次の集落の中へは歩いていく。この集落も古い家が多く、表側には「絵手紙」が飾られている。

その集落のはずれで、不思議な像を見た。小さな30cm程度の観音像の横に等身大よりも少し大きい少年(多分)がしゃがみこんでいる像で、破れ笠をかぶり、悲しげな顔。ガイドブックには何も書かれておらず、そばにある木の碑は判読不能。インターネットで調べるとこの像は木彫り。但し由来は不明。観音像はマリア像かもしれない。

### 不思議な少年像



### 53次宿場の柱



### 坂下宿 48番目

道路標識には鈴鹿峠まで4.3Kmとあり、その先に鈴鹿馬子唄会館があつて無料休憩所となっているので小休憩。会館の中には馬子唄が聞ける設備があり、旅人の為の資料がある。その資料によれば、現代の東海道を歩く人の50%強は60歳代で、50%が2年ほどかけて歩くとのこと。私の東海道ウォーキングは全くの「平均値」らしい。この馬子唄会館のそばの道沿いに、東海道53次の宿場名を書いた53本の柱が立てられている。その先が坂下宿となるが、絵手紙のある旧家は何軒かあるものの、宿場の遺構は何も残っていない。坂下の由来は鈴鹿峠の坂の下とのこと。

### 鈴鹿峠へ

坂下宿を出て歩いていくと、岩屋十一面観世音菩薩の石碑のある清滝観音があり、ここは修行の道場らしいが人影はない。その先で道はだんだん狭くなり、舗装はしてあるものの車1台分の幅で、左右の木々が緑のトンネルを作り、いい雰囲気。その緑のトンネルの先に片山神社があり、鳥居の中へは「危険で立ち入り禁止」の立て札、鳥居のそばには「鈴鹿流なぎなた術発生地」の碑が建てられている。

### 緑のトンネル



### 立ち入り禁止の片山神社





片山神社の先は、人だけしか通れない急勾配でつづれ折りの山道、いよいよ鈴鹿峠へ。他に峠越えの旅人の姿は無く、八丁二十七曲と言われる紅葉・黄葉の絨毯を敷き詰めた急な坂道を、大きく口を開けて息をしながら登っていく。視界の端に黒いものが動き、ビクッとしてみたら、手のひら大の黒い枯れ葉が舞っている。10分程登って峠の上にたどり着く。

右に左につづれ折りの峠道



紅葉・黄葉の絨毯



鈴鹿峠の磐座、鏡岩

鈴鹿峠

**鈴鹿峠**  
 鈴鹿峠(378m)を越える初めての官道は「向須波道」と呼ばれ、平安時代の仁和2年(886年)に開通した。  
 八丁二十七曲といわれるほど、急な曲がり道の連続するこの険しい峠道は、平安時代の今昔物語集に水鏡商人が盗賊に襲われた際、割っていた蜂の大群を呪文をとなくて呼び寄せ、山賊を撃退したという話や、坂上田村麻呂が立烏帽子という山賊を捕らえたという話など山賊に関する伝承が多く伝わっており、箱根峠に並ぶ東海道の難所であった。  
 また鈴鹿峠は、平安時代の歌人西行法師に「鈴鹿山 浮き世をよそにふり捨てていかになりゆく わが身なるらむ」と詠まれている。  
 江戸時代の俳人、松尾芭蕉は鈴鹿峠について「ほっしの 初に越ゆる 鈴鹿山」の句を残している。  
 鈴鹿国定公園 環境省・三重県

峠の上は平坦な杉林となっていて、説明板と芭蕉の句碑があり、更に脇道をその上の「鏡岩」があるとのことで寄り道。

この鏡岩は平らな顔面が鏡のような光沢を帯び、盗賊は岩面に映った旅人を襲ったという。鏡岩の説明には、これは古代の磐座(いわくら)であるとも書かれている。



ほっしの  
 初めに越ゆる  
 鈴鹿山  
 芭蕉

鏡岩



磐座は山の頂上にある大きな石(岩)が古代の信仰の対象になったもので、各地にあり、現在はパワースポットの間所としてTV・雑誌等で取り上げられている。私の住んでいる桜井の、三輪山の頂上にある巨石がその代表的なもので、今でも三輪神社のご神体であり、三輪山の磐座は写真撮影はもちろん、山の中では飲食も禁止、入山の前にお祓いを受けなければならない。



鏡岩から眼下の国道1号線



ここはそんな規制は何もなく、黒いラブラドルレトリーバを連れて歩いている人に出会い、一緒に鏡岩に登る。恐れ多くも鏡岩の上に立って眺める景色は絶景、折れ曲がって峠に向かう国道1号線が見える。

鈴鹿峠を越えて峠を過ぎると林が途切れ、お茶畑が広がり、金谷で見たものと同じ防霜ファンがある。ここに無料休憩所があり小休憩。往時にはここに峠の茶屋があったらしい。休憩所の先に巨大な常夜燈がある。この常夜燈は万人講常夜灯と呼ばれ、約270年前に四国の金毘羅神社から移されたとされる物で、高さ5.4m、重さ38tもあるとのこと。

お茶畑と防霜ファン



巨大な万人講常夜燈



旧東海道は又国道1号線と合流する。その国道1号線の道路標識では滋賀県に入ったことになる。右の道路標識を見て頂きたい。滋賀県の下に甲賀市とあり、読みはKokaつまり「こか」と書いてある。長年、「いが・こうが」と呼んでいたが「こうが」は間違いで「こうか」が正しいことになる。でも「こうかりゅう忍者猿飛佐助」では迫力はないな、とインターネットで調べたところ、甲賀流は「こうがりゅう」と発音し、「こうか」と「こうが」はどちらもありで、行政的な名称は「こうか」らしい。

国道1号線の道路標識





鈴鹿山地は鹿や猪の多いところ、銃猟シーズンにはハンターで賑わう、この付記の畑には獣害防止の電気柵を設置しているところも多い。

電気柵



鈴鹿馬子唄碑



山中

延々と国道1号線を歩き続けて山中に着く、ここには「坂は照る照る 鈴鹿は曇る あいの土山雨が降る」の鈴鹿馬子唄碑がある。

あいの土山の意味は、「あいのう」が北伊勢地方の方言で「まもなく」という意味があるので、「まもなく土山は雨が降る」ということらしい。

鈴鹿山の両側で全く天気が異なっていることを歌っていて、鈴鹿を越えて土山は日本海気候となる。当日も関での小雨は坂下では曇り、その後は晴れの良い天気となった。

旧東海道は第2名神の下をくぐる、右の写真の下に停まっている軽トラックと比較してほしいが、第2名神の橋脚の巨大なこと!

巨大な第2名神の橋脚



山中一里塚に到着、馬子と馬の石像が迎えてくれる。

馬子と馬の石像



大高源吾の句碑



白川神社の紅葉



間(あい)の宿 猪鼻 蟹坂

蟹坂古戦場跡碑



国道1号線からそれて猪鼻村の中を通り抜ける、ここには「いの花や早稲のもまるる山おろし 子葉」の句碑があり、子葉とはなんと赤穂四十七士の一人大高源吾で、旅の途中に詠んだとのこと。

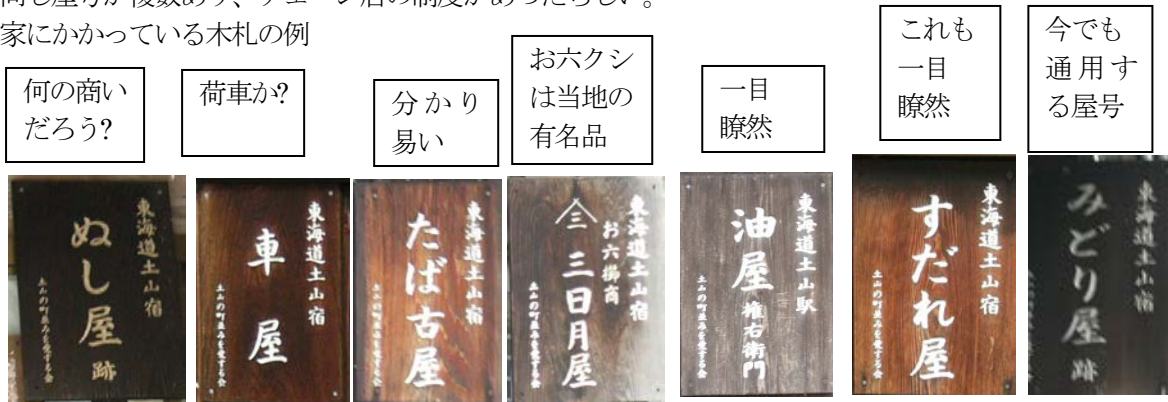
猪鼻村の次は蟹が坂で、何軒か旧家が残っている。その蟹が坂の入り口にある白川神社の紅葉が鮮やかな赤だったが、惜しいことに既に1/3ほど散っていた。蟹が坂のはずれには「蟹坂古戦場跡」の碑があり、時は戦国時代、1542年9月、伊勢の国司北畠具教が山中城を攻め、城主、山中丹後守秀国の要請にこたえて守護六角定頼が援軍を送り、ここ蟹が坂あたりで合戦となったとのこと。

土山宿 49 番目

旧東海道は坂上田村麻呂を祭る田村神社の横で左折し、国道 1 号線を横断すると「道の駅 あいの土山」がある。旧東海道はこの道の駅の裏手に抜けていて、すぐそこからが土山宿となる。土山宿は亀山宿と同様に、街道沿いの家にはかつてそこにあった建物の屋号名を書いた木札がかかっている。

同じ屋号が複数あり、チェーン店の制度があつたらしい。

家にかかっている木札の例



京都 15 里  
江戸 110 里



土山宿の入り口に道標があり、京都へ 15 里、江戸へ 110 里とある。 ついに 9 割を歩いたか。

宿場内に鬼貫の句碑がある、上島鬼貫は、大阪・伊丹生まれの俳人。 東の芭蕉、西の鬼貫とも言われ独特の境地を開いた人で、東海道を旅の途中、土山に寄り、お六櫛を買い求めたときに読んだ句。上の写真の三日月屋で買ったのかも知れない。



「吹け波(ぼ) ふけ櫛を買いたり 秋乃風 鬼貫」

旧家を利用した蕎麦屋を見つけ昼食、にしん蕎麦を食べて 900 円也、美味しかった。 ウェイトレスに聞くと、その蕎麦屋の家屋は、夏は涼しくてエアコンも要らないほど、しかし冬はすきま風が強くて住めたものではないそう、さもあらん。

途中の地蔵堂にある地蔵、小学生が作ったのかと思うほど稚拙でびっくり。



蕎麦屋



あまりにも稚拙な地蔵



土山宿は関宿ほど連続していないが、多くの旧家が保存されており、土山本陣も現存していて資料館となっている。  
見学は割愛。



土山本陣

森鷗外と土山  
森鷗外の祖父は津和野藩の藩医で参勤交代の途中に土山で病没し、後年、鷗外が土山の常明寺に墓を建立した。その常明寺には芭蕉の句碑があるとのことで寄り道。芭蕉の句は「さみだれに鳩のうき巢を見にゆかむ」だが、この鳩が読めず、調べたところ「カイツブリ」で古名は「ニオ」。

芭蕉句碑  
一番上の「さ」しか読めない



今回の巨木はこの常明寺の大しいの木、但し樹齢とサイズは不詳。

常明寺の大しいの木



鷗外が宿泊したと言う旅籠の平野屋も残っている。

森鷗外が宿泊した平野屋



土山の民家で、玄関に赤い造花を飾った家が何軒もある。一体どういう意味だろう。

造花を飾っている家





土山宿の橋

くるみ橋



宿場の中の小さな川にかかっている橋の欄干は白壁で屋根瓦付き、その白壁に東海道の絵や民謡の歌詞などが描かれていて風情がある。

だいこく橋



更に宿場はずれにある歌声橋は屋根付、といっても「マディソン郡の橋」と違ってプラスチック製であり、ロマンチックな雰囲気とは程遠い。歌声橋の名の由来が気になってインターネットで調べたが見つからず、謎のまま。

歌声橋



ケンケト踊り

瀧樹(たぎ)神社の前を通りかかり、難しい読みの神社なので由来が書いてあったのを読んでいたら、2000年前に倭姫命(やまとひめみこ・・・垂仁天皇の皇女)がこの場所で料理用の建物を作った云々等の伝説よりも「ケンケト踊り」の字の方が目が引いた。ケンケトとは聞くのは初めて、珍しい名前なので、気になったので調べた。

インターネットには、

「龍樹神社の祭礼に奉納される踊りで、「近江のケンケト祭り、長刀振り」として国の無形民俗文化財。

祭礼には、前野、徳原と甲賀町岩室の3地区が参加し、前野、徳原が4年に一度、岩室が隔年で踊り番を受け持つ。当日13時頃、集落内で一踊りしたのち、銚、役員、頭などの羽で飾って肩車された7~12才の踊子(その姿から献鶏頭の字が当てられ、太鼓や撥の囃子に合わせて踊るさまは闘鶏を思わせる)、そして

20本の赤い花が突き刺された花笠の順に並んだ行列が出発。前野で3地区が集合し、神社へと向かう。14時頃最初に境内の馬場で馬場踊りのあと、「花ばい」になる。祭礼の参加者・観衆が隙あらば花を奪い取ろうとし、それを警護の人が手にした青竹で容赦なく叩く荒っばい行事である。このあと、本殿前・天満宮前とその周囲、社務所前で宮踊りが踊られる。休憩ののち、神輿渡御に続き、馬場でもう一踊りして、野洲川畔のお旅所へ。式典のあとにもう一踊りしてから、神輿とともに各地区へ引き揚げ」とある。

ケンケト踊りの写真





### べんがら格子と茅葺の家

土山宿の特長は宿場が大きいこと、1 時間歩いてはまだ土山宿、旅籠や屋号の木札をかけた家が続き、旧家もある。 今度は格子を赤く塗った弁柄(べんがら)格子の家が現れた、一体何の商売をしていたのか。赤く塗った格子のことをべんがら格子と言うがその「べんがら」とは何だろうと思ひ、調べたらオランダ語で赤い塗料とある、へえー、また一つ勉強した。

その先に今度は茅葺の家が現れた。 この 53 次の街道筋で初めて見る茅葺き、壁に貼られた某首相のむっとり顔のポスターが余計。

べんがら格子の旧家



茅葺の家



### 垂水頓宮



「垂水頓宮御殿跡」の石碑があり、足を止めて説明板を読み、インターネットでも調べた。「齋王（さいおう）とは、天皇が即位される度毎に、天皇のご名代として、皇祖である天照大神の御心霊の御杖代（みつえしろ）とつとめられる皇女・女王の方で、平安時代に新しく伊勢参道がつけられると、この道を齋王群行（さいおうぐんこう）の形でご通行されることとなった。 京都から伊勢の齋宮（さいぐう）まで、当時は五泊六日もかかり、その間、近江の国では勢田・甲賀・垂水の三ヶ所、伊勢の国では鈴鹿・一志（いちし）の二ヶ所で、それぞれ一泊されて齋宮まで行かれたのである。その宿泊された仮の宮を頓宮（とんぐう）といい、現在明確に検証されている頓宮跡地は、五ヶ所のうち、ただこの垂水頓宮（たるみとんぐう）だけである。」 なるほど。

その先には久しぶりに見る東海道の松並木、最後に見たのは確か知立、ベンチが置いてあったので小休止。

久しぶりの松並木



### 鴨長明の歌碑



地名は大野になっていて大野公民館があり、その玄関先に鴨長明の歌碑「あらしふく 雲のはたての ぬきうすみ むらぎえ渡る 布引の山」がある。 この歌の意味が分からず調べたが、短時間では見つからずギブアップ、この付近の景勝地である布引山を歌ったことは分かるが。



### 天然メダカと珍字

民家の前に天然メダカと書かれた手水鉢が置かれていて思わず覗き込んだが水草以外は何も見えず、こんな狭い入れ物ではメダカも可哀そう。

ところで右のポスターの苗字とそのふりがなを見てください。こんな文字、こんな読みがあるのかとびっくり。まあ、覚えられ易くて選挙には有利だろうな。



### 水口宿 50 番目

やっとたどりついた水口宿の入り口。

時刻は既に3時過ぎ、宿場見学は次回にして、殆ど何も見ずに最寄の近江鉄道水口石橋駅へ向かい、4時過ぎの電車に乗る。

### 今回のマンホールの蓋

関 鹿と雉



土山 雉



18日目は5万歩、約35Km。

往きはJR奈良駅-JR賀茂駅-JR関駅のルートとなりJR奈良駅の5時始発の電車に乗るべく家を出たが、JR奈良駅近辺の駐車場は早朝でクローズ、やむを得ず近鉄奈良駅近辺の駐車場に車を預けてタクシーでJR奈良駅に行き、始発に間に合う。帰りは複雑、近江鉄道水口石橋駅で4時に乗車し、貴生川駅でJR草津線に乗り換えて草津へ、草津でJR新快速に乗り京都へ、京都で近鉄に乗り奈良へ。駐車場に置いてあった車で桜井の家に着いたのは午後7時。

次回は 水口 -> 石部 -> 草津

### 18日目

